

「子どもたちの戦争体験」開催！

本日、杉並区役所2階ロビーでは、「子どもたちの戦争体験」と題したパネル展が始まりました。この展示会は、杉並区立小・中学校で校長や教頭を務めていた方たちで組織している愛杉会（あいさんかい）が企画したもので、太平洋戦争終戦から70周年に合わせ、戦争の中で翻弄された子どもたちにスポットを当てた内容となっています。展示は、31日まで。

第二次世界大戦の終戦は、昭和20年8月15日。それから70年の月日が過ぎようとしています。終戦末期、昭和19年7月にマリアナ諸島のサイパン島がアメリカ軍に占領や沖縄戦での敗戦によって、日本本土での決戦が予測される事態になりました。

こうした戦況の中で国は、アメリカ軍からの本土攻撃に備え、東京・横浜など大都市の国民学校（当時の小学校）の児童を、急遽より安全な地域へ一時的に移住させることとしました。杉並区でも昭和19年8月に、3年生から6年生が長野県と宮城県へ疎開が実施されました。また、昭和20年5月には、「根こそぎ疎開」として、さらに1年生から6年生までに疎開が強化されました。

子どもたちは、この戦争の時代の中で少国民として、将来の戦士に位置付けられていました。愛杉会は、小中学校の教員で構成されていて、こうした子どもたちの戦争体験を多くの人に見てもらい、戦争を風化させないこと、次世代に語り継ぐこと、もちろんその戦争の悲惨さを伝える



ことを目的に、この展示会を開催しました。展示パネルは、模造紙26枚で、メンバーの一人である久保田恵政（くぼたしげまさ・86歳）さんが、昭和20年3月に子どもたちを引率して、長野県に学童集団疎開をした時の記憶や資料をまとめたものです。写真や図が多く用いられ、当時の子どもたちの暮らしぶりがよくわかる内容となっています。